

分野・専門名： 英語学

試験科目： 専門英文の日本語訳

【正解・解答例】

(1) 比較統語論は、人間言語の普遍的ではない特性をどのように特徴づけるのが最善かという問題に直接関わる統語理論の一側面と考えることができる。言い換えれば、比較統語論は、統語的変異の根底にあると考えられる媒介変数の概念をどのように理解するのが最善かという問題に直接的に取り組んでいる。言語間の差異の研究は、言語に共通するもの、すなわち、言語固有の媒介変数と相互作用して観察される変異を生み出す普遍文法（UG）の原理の研究と並行して進められなければならないことは明らかである。同様に、普遍的な統語原理の探求は、統語的変異に細心の注意を払わなければ進められないと考えるべき十分な理由がある。

(2) 他の言語学者と同様、認知言語学者は、言語そのもののために言語を研究する。彼らは、言語の体系性、構造、言語が果たす機能、これらの機能が言語体系によってどのように実現されるかを記述し、説明しようとする。しかし、認知言語学者は、言語が思考のパターンを映し出すという理由でも言語を研究する。言語は認知機能を知るための窓（手段）を提供し、思考と観念の性質、構造、組成への洞察を与える。認知言語学が言語研究への他のアプローチと異なる最も重要な点は、言語が人間の心のある特定の基本的な特徴と設計特性を映し出すと仮定することである（Evans 2015a）。そのため、言語は心を見るための窓を、部分的であれ提供する。本書を通して見ていくように、この仮定は、認知言語学の企ての中で展開される研究の射程、方法論、モデルに対し、広範囲に渡って含意を持つ。特に、言語のモデルを判断する一つの重要な基準は、そのモデルが心的に（心の研究として）妥当か否かという点である。

分野・専門名： 英語学

試験科目： 専門英文の日本語訳

【出題の意図】

英語で書かれた統語論や意味論の専門的な文献を日本語に訳させることにより、英語学研究を行うために必要となる専門英文の読解力を測定する。

分野・専門名： 英語学

試験科目： 一般言語理論

【正解・解答例】

I

(1)

- a. 統語構造が意味部門へと転送され、意味部門で意味解釈を与えられることにより形成される、言語外の体系である思考に関わる概念・意図体系への入力となる接触面のこと。
- b. 併合操作の1つで、2つの独立した要素に対して適用される操作のこと。つまり、ある要素 X をその外部にある要素 Y と併合すること。
- c. 一致操作において、値を持たない解釈不可能素性は探査子と呼ばれ、対応する解釈可能素性を持つ目標子により解釈不可能素性に値が付与されるが、その両者の関係のこと。例えば、T が持つ解釈不可能素性が探査子となり、目標子である主語が持つ解釈可能素性と一致関係を結ぶことにより、前者に値が付与される。
- d. 「時間」「空間」「視覚」など、それ以上基本的な概念に帰することのできない概念。身体的な経験に根ざし、概念メタファーに使用されるとされる。
- e. 認知言語学では、言語表現の意味を、典型的な成員と周辺的な成員からなるプロトタイプカテゴリーと考える。例えば、英語では、robin, swallow, ostrich といったさまざまな生き物を、bird としてカテゴリー化している。
- f. 類像性、すなわち形式と意味の間に感じられる類似性の一種。形式同士の関係と意味同士の関係が類似・対応しているという記号論的性質。例えば、John and Susie got married and had a baby. と John and Susie had a baby and got married. の意味が異なるのは、節の順序が事象の順序を写す図式的類像性が原因である。

(2)

- a. 移動した要素を元の位置に戻す操作のこと。例えば、Which picture of himself does John like? において、himself は John と同一人物を指すことができるが、移動した which picture of himself を like の目的語位置に戻すことにより、John が himself を c 統御することが可能になり、束縛原理 A を満たすためにこの文は文法的である。
- b. 述語が選択する主語や補部に課する制限のこと。例えば、動詞 eat は食べ物を表す目的語を必要とするので、目的語に happiness が生じると逸脱した文になってしまう。
- c. 動詞句省略において、省略された動詞句内に代名詞がある場合に、先行詞となる動詞句内の代名詞と異なる指示を持つ現象のこと。例えば、John respects his professor and Bill does too. において、先行詞の動詞句内の his は John を指すが、省略された動詞句内の his は Bill を指すことが可能である。
- d. Langacker の認知文法において、ある言語表現の意味構造のうち、他の言語表現で具体的

に表されることになるスロット。例えば、tall giraffe において、giraffe は tall の e-site を精緻化する。

e. 開いた類の語彙的要素（内容語）が開いた類の文法的要素（機能語）へと歴史的に変化する現象。例えば、古英語の動詞 *cunnan*（知る）は文法化により助動詞 *can* となった。

f. 言語表現を理解するために使用される、物事を単純化した百科事典的知識。例えば、*bachelor* という語は、「男性は適齢期になると女性と結婚する」という単純化された知識の中で、「未婚の男性」を意味する。そのため、この知識にそもそも合わない *Pope* や *Tarzan* は、未婚の男性でも *bachelor* ではない。

(3)

a. 例えば、*A man arrived at the party with long hair.* において、*with long hair* は主語名詞句 *a man* を修飾しているにもかかわらず文末にある。このような文において、名詞句の内部から前置詞句や関係節を右方に移動し、名詞句から分離する操作を外置という。

b. 主要部 X は、それを c 統御する最も近い主要部 Y に移動しなければならないとする、主要部移動に課せられる局所性条件。例えば、**Have John will read the book?* において、*have* は最も近い主要部 *will* を越えて移動しているため非文法的となる。

c. 例えば、*I believe John a genius.* における *John* と *a genius* の間には主述関係があるため、下線部は節構造を持つと考えられるが、補文標識、時制、動詞などの要素が欠けている。このような、節を構成する要素の一部が欠けており、定形節や不定詞節よりもサイズが小さいと考えられる節のことを小節という。

d. オノマトペ、擬音語・擬態語。バントゥー言語学由来の用語だが、今ではあらゆる言語のオノマトペの総称として用いられている。

e. ある概念を隣接する別の概念を参照して捉えること。例えば、*answer the door* は、*door* で *door* のところにいる人を指す。

f. 複数の意味や形式の共通点を取り出した抽象的な知識構造。例えば、*in* という語の意味は、*in the room* であれ *in 2025* であれ、何かが容器の内側に位置するというスキーマで捉えられる。一方、*Tom kissed Mary.* と *Tom likes Mary.* からは「主語 動詞 目的語」という統語的なスキーマが抽出できる。

II

(1)に示す通り、*much, one* が数量詞 *more* を修飾し、数量詞句 *much more, one more* が名詞句の主要部 *time* を修飾するという構造をしている。

(1) a. [名詞句 [数量詞句 *much more*] *time*]

b. [名詞句 [数量詞句 *one more*] *time*]

一見同じに見える *more time* だが、(1a)の *time* は「時間」を表す不可算名詞で *more* は *much* の比較級、(1b)の *time* は「回」を表す可算名詞で *more* は *many* の比較級である。

much も *many* も比較級になると同形の *more* になるが、不可算名詞を修飾している場合は *much* の比較級、可算名詞の場合は *many* の比較級である。

(2) a. much water, more water water は不可算名詞で more は much の比較級

b. many books, more books books は可算名詞で more は many の比較級

比較級の前には差の程度を表す表現を置くことができる。例えば much の比較級 more の前には much, many の比較級 more の前には many を置くことができる。

(3) a. much more water more は much の比較級

b. many more books more は many の比較級

差は具体的な分量を表す名詞句で示すこともできる。例えば、差や追加分が 2 リットルであれば two liters more water と言える。被修飾名詞が可算名詞の場合、a dozen more books のような表現も可能だが、名詞自体が単位を表すことができるので数詞のみで分量を表すこともできる。数詞が one であれば名詞は単数形で one more book、two であれば複数形で two more books となる。

以上の考察から、修飾語が much であれば more は much の比較級、one であれば many の比較級となり、不可算の数量詞句 much more に修飾される time は「時間」を表す不可算名詞で、可算の数量詞句 one more であれば time は「回」を表す可算名詞の単数形と結論することができる。

分野・専門名： 英語学

試験科目： 一般言語理論

【出題の意図】

I

生成文法や認知言語学などの専門用語を解説させることにより、英語学研究を行うために必要となる一般言語理論の知識を測定する。

II

具体的な英語の表現について文法的観点から観察、説明する力があるかどうかを見る問題。特定の言語理論の枠組みを用いて説明することを求めるものではない。

分野・専門名：英語教育学

試験科目：

【正解·解答例】

問題 1

以下のような修正点が考えられる。

- コントロールグループ（対照群）がないので、実験中に参加者が経験する他のアクティビティーに結果が影響されてしまう可能性がある。
- 難度に関して洋書『Harry Potter』が適切かどうか再考の余地がある。
- 個々の参加者のリーディング能力により、洋書『Harry Potter』の読書時間にばらつきが出る。それに伴い、事後テストのタイミングにもばらつきが生じる点に関して再考の余地がある。
- TOEIC テスト 2 回目（事後テスト）で点数が上がるという結果になっても、テスト慣れしたという解釈が可能な点に関して再考の余地がある。
- リスニングとリーディングの能力を測る TOEIC テストを計画しているが、多読活動がリスニングに影響するのか理論的な背景を再考してみる必要がある。
- 半数以上の参加者のスコアが上がれば多読の効果があるとみなしてよいのか、データ分析手法を再考してみる必要がある。

分野・専門名：英語教育学

試験科目：

【正解・解答例】

問題 2

In the context of English language classroom at Japanese junior high schools, I believe that the principle of “Get it right in the end” is more suitable than “Get it right from the beginning.” Although instructors may be afraid that learners’ incorrect use of grammar can be consolidated (i.e., fossilization), SLA research has demonstrated that there is a certain order of grammar acquisition and that certain grammatical structures cannot be acquired until prerequisite forms due to the processing constraints (e.g., processability theory). For instance, the third person singular -s is usually introduced in an earlier unit of English textbook in Japan, this grammatical structure requires the learner to acquire the systems of tense (i.e., present tense) and singularity (i.e., plural vs. singular), and thus the acquisition of this form is likely to be acquired at the later stage of L2 development. In other words, some forms cannot be used accurately despite error correction by the instructors. Another relevant issue is the way of L2 acquisition. SLA theories suggest that L2 acquisition happens through interaction including negotiation for meaning and pushed output (e.g., Long’s Interaction Hypothesis). In order to encourage students in authentic, meaningful interaction, the classroom atmosphere needs to be meaning-oriented as opposed to form and accuracy. Although some corrective feedback during meaning-focused interaction (e.g., recast) can contribute to L2 learning, the flow of the conversation must be prioritized. Only errors that can hinder the smoothness of communication should be targeted for corrective feedback for the sake of L2 development.

評価基準

- 明確に場面を設定して、意見を述べている
- 根拠に適切な理論を用いている
- 根拠に適切な具体例を用いている
- 反対側の意見や懸念について触れている

分野・専門名： 英語教育学

試験科目：

【正解・解答例】

問題 3

Because bilinguals can use two languages, it is clear that they enjoy a linguistic advantage compared to monolinguals, who can only use one. However, it is less clear whether bilinguals have any advantages beyond their language abilities. Early studies reported a bilingual advantage in non-linguistic cognition, but most studies published after 2011 have not supported this claim. The authors of this article argue that reported advantages in earlier work were likely due to methodological problems. For example, many studies relied on small sample sizes, failed to control for differences in background between bilinguals and monolinguals, or analyzed the data in questionable ways. Brain imaging studies have not provided conclusive evidence either because neurological differences between the two groups did not necessarily indicate behavioral advantages for bilinguals. Overall, the authors have a reserved attitude toward the idea of a bilingual advantage.

分野・専門名：英語教育学

試験科目：

【正解・解答例】

問題 4

This study explored what influences Hungarian high school students' performance on English reading tests. The researcher assessed the students' reading ability in their first language (Hungarian), their word-level reading skills, their working memory capacity, and their level of anxiety while reading in English. The aim was to see how these factors related to the English reading performance in terms of test scores and the amount of time they needed to complete the test.

The results showed that students who felt more anxious during the test tended to read more slowly and performed less accurately. Students with stronger first-language reading comprehension and better working memory performed better on the test. However, basic word-level reading skills in the first language seemed not to be associated with reading accuracy scores in L2. Additionally, students who have difficulties with reading in both their first and second languages needed more time to read the texts.

These findings suggest that second language reading tests should adjust the time for reading test administration. Fixed time limits may disadvantage learners who read more slowly, especially those with literacy-related difficulties like dyslexia. By allowing more time, test designers can create fairer testing conditions that give all learners a better chance to demonstrate their true reading ability.

評価基準

- 研究目的が正しい
- 変数に関する情報（統計手法）が正しい
- 結果の説明が正しい
- 研究の示唆・解釈が正しい

分野・専門名：英語教育学

試験科目：

【出題の意図】

問題 1

英語教育学、第二言語習得、および心理言語学分野で見られる実験を用いた研究において注意すべきポイントが見えているかを評価する。また、他人の研究発表に対してコメントする能力を評価する。

問題 2

第二言語習得に関する基本的な知識を持っているかを確認するとともに、論理的に自分の意見を述べる力や、自身の主張を批判的に検討する力を評価する。

問題 3

専門的な論文を読む能力を評価する。専門用語（例：executive functions, analysis-of-covariance, convergent validity, confirmation biases）を用いずに平易な文章で内容を伝えることが期待される。また、二言語使用者（バイリンガル）に認知的な利点があるかどうか調べるために、一言語使用者（モノリンガル）との比較が行われていたということを踏まえた上で、過去の研究にどのような問題がみられたのかわかりやすく伝えるスキルを測る。

問題 4

英語読解力や研究に関する基本的な理解をもとに、読んだ内容を読み手の属性（ここでは専門外の人）にもわかるように表現を調整する力、そして研究内容を適切に伝えるための論理的な言い換えや説明のスキルを測る。